

# 南紀のニホンミツバチ

誌名	ミツバチ科学
ISSN	03882217
著者名	下地,政晴
発行元	玉川大学ミツバチ科学研究所
巻/号	2巻1号
掲載ページ	p. 37-38
発行年月	1981年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 南紀のニホンミツバチ

下 地 政 晴

和歌山県東牟婁郡及び新宮市では所々で2～3群程度のニホンミツバチを飼育している人家がある。中には10群ほども見かける。昭和55年(1980)8月15～16日、私は北山村小瀬の榎本茂氏の飼育蜂群を見学する機会を得たので日頃の知見も加えて小文にまとめてみた。

南紀地方ではニホンミツバチの分蜂群を捕獲して飼育を始めるが、このため予め多くの空箱が山中に置かれる。その中には毎年必ずといってよいほど営巣する場所があるようで、その1例として以前、お地藏さんのあった処があげられる(図1)。また、分蜂したニホンミツバチを容易に捕獲するため、蜂群の近くの木の低い枝に、杉皮を所々にぶらさげ、分蜂群が一時これにとまるようにしている。

飼育の箱は40cm前後のものが多く、時には中が空洞になっている古木も利用される。冬期はワラで覆いをしているものや、夏期の防暑もかねて外わくを作っていることもある。

採蜜は6～8月頃で、6月頃採蜜できる年は蜂数や管理など、いろいろな面で順調のようである。昭和55年の採蜜量は非常に少なくほとんど収量が皆無の蜂群も多かった。

樹幹が空洞化したサクラのニホンミツバチ(図2)では、本年は採蜜できなかった。なお、観察者の右脚の膝の前に石が押し込まれている。ここには大きな穴があいており、ある年、ここからテン(動物)が侵入し、蜂群をあらしたことがあるという。

採蜜後は切りとった部分でフタをし、太い針金でしばって次期まで放置する。

ニホンミツバチの大敵であるスズメバチからの害を防ぐため、箱のまわりを金網で囲む人や

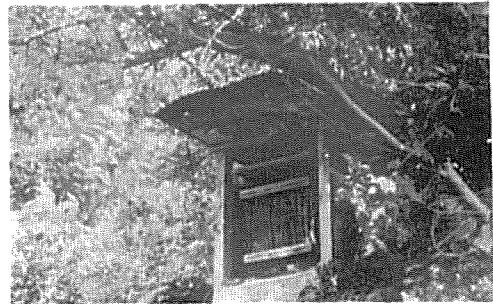


図1 山中のニホンミツバチ巣箱

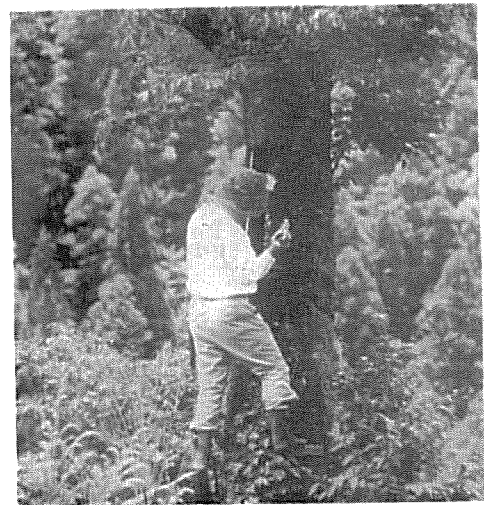


図2 サクラの木の空洞に営巣

巣門を小さくする例も見かける。

山の奥地ではクマの害から守るため、コンクリート板や鉄骨を使用して巣門前にもものしい防壁を作ったところもある(図3)。

蜂群により気のあらいのもあることを考慮して顔面だけは刺されることのないよう簡易面布だけはかぶっているが、上半身は裸体のままで採蜜することもある(図4)。

(〒647 和歌山県新宮市佐野1653-9)

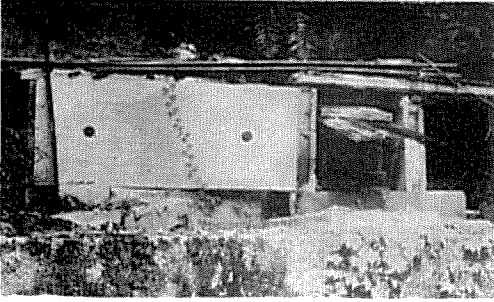


図 3 クマの害を守るコンクリート板

SHIMOJI, MASA HARU. Keeping Japanese honeybees in south Wakayama. *Honeybee Science* (1981) 2(1) 37-38. Sano 1653-9, Shingu, 647 Japan.

Some beekeepers have several colonies of Ja-

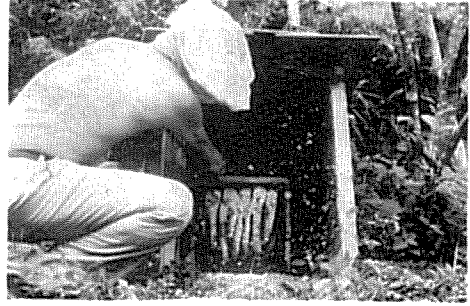


図 4 採蜜風景

panese honeybees to extract honey in June to August. Almost no honey crop was harvested in 1980.

Some protection are needed against *Vespa mandarinia* and bears in this area.

## 私の蜜蜂

高島 泰三

公務員である私は、昭和47年ころ、忙しい勤務の暇をぬって、市内の書店で購入した「新養蜂」農学博士、徳田義信著、の養蜂書を頼りに、岐阜県下から1群の蜜蜂を入手して、独学で養蜂を始めた。あれから8年の歳月が流れ、現在では15群を3カ所に定飼分散方式をとるまでに成長した。勤務の合い間をみても観察実験に励んでいる、また、この間、私のすすめで養蜂を始めた人も数人いる。私のモットーとするところは、だれでも、どこでも蜜蜂は飼えるということと、女王の羽を切らず、分蜂させず、殺さず、巣箱には1年王、又は2年王が存在しているという自然の飼い方をするというのである。3カ所に分散しているうちの1カ所は、国有地である、お寺の境内で、人出でにぎわう春のお彼岸には、わが蜂場も黒山の人だかりと

なる。よく人からローヤルゼリーとは何ぞやという質問を受ける。それに対して、私は、ローヤルとは英語で王室、王様という意味であり、ゼリーとは、乳を固めた柔らかい乳液をいうと、説明している。この物質は滋養強壯剤として市販されているが、人間の、どのような病気に対しても万能であるとは、断言できない。蜜蜂と聞いただけで、鳥肌立て、卒倒する体質の人もいるからである。あるとき私は人に頼まれて、その人が所有する競走馬が病気で倒れたとき、私は蜜1斗、大豆1斗、ニンニク、人參、ローヤル・ゼリー1kgを混合して1年間暗室にねかせたものを、その人に与えた。翌日、その人から電話があって、馬は一夜にして立ち上がり、病気は全快したということであった。私はこの話を聞いたとき、感激に胸が熱くなったことをおぼえている。

目を閉じると重い荷物を背負った働蜂が、転がるように巣門に入る姿が険に浮かび、それが今はこの世にない、当時83歳の祖父が兵庫県の山奥から一人で蜜を背負って下山する姿を想い起こさせた。5月生れの私を一層元気づけ励ましてくれるものは、5月の季節にふさわしい蜜蜂と祖父の面影である。

(〒183 府中市本町4丁目11-6)